

資料 歌会始の推移

戦前期 (1878～1946) 御歌所、専属の歌人、寄人を選者とする宮廷内の歌会、一部公募はあったが、閉鎖的。明治天皇歌集の出版、謹解書、謹解記事により戦意高揚を図る

戦後第1期 (1947～58) :、戦後当初は御歌所の寄人と呼ばれた千葉胤明、鳥野幸次らが選者に混在したが、50年にすべての選者が民間歌人の斎藤茂吉、川田順、窪田空穂ら歌壇の重鎮へと移行。57年、初めての女性選者四賀光子（太田水穂妻）、茂吉没後、土屋文明に代わる。応募者数千人から1万人前後低迷

第2期 (1959～66) 1959年4月皇太子結婚、いわゆるミッチーブーム。応募歌数激増、1964年、4万7000首もの歌が寄せられ、ピークとなる。五島美代子加わり女性選者二人時代。60年深沢七郎「風流夢譚」(『中央公論』12月号) 61年2月嶋中事件など、皇室批判タブー化

第3期 (1967～78) 67年選者に佐藤佐太郎、宮柊二入り、新聞歌壇化・大衆化へ。67年初の建国記念日、68年明治百年、70年大阪万博、71年天皇生誕70年・天皇訪欧、76年在位50年記念行事など続く

第4期 (1979～92) 79年戦中派の岡野弘彦（1924～）と上田三四二（1923～1989）が選者入り、応募歌数3万首前後を推移して1980年代へ。入選者の高齢化、女性の増加。89年昭和天皇死去

平成期 (1993～) 昭和天皇没後1993年には、かつて前衛歌人といわれ、歌会始を痛烈に批判していた岡井隆（1928～2020）の選者となるが、応募低迷がつづく。

特徴としては

- ① 選者の若返り、新聞歌壇選者、話題性のある歌人の登用・・・岡井隆、歌人夫婦・・・、
- ② 入選者の世代的配慮、若年化（中高生を必ず入れる）
- ③ 短歌ジャーナリズム、マスメディアとの連携 詠進要項掲載、歌会始関係記事の頻出、歌会始入門書、天皇皇后の歌集・鑑賞書の出版
- ④ 他の国家的褒章制度との連動、文化勲章、文化功労者、芸術院会員、紫綬褒章、芸術選奨など
- ⑤ 陪聴者選出による選者予備軍、待機組への目配り
- ⑥ 天皇・皇后の短歌の主題の多様化、自然、文化、平和、慰霊、福祉、環境、皇統譜など